# 珈琲

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

## 注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
珈琲

【Ｎコード】
Ｎ８４２０Ｆ

【作者名】
坂田火魯志

【あらすじ】
明治維新の話。西洋から来た珍しく新しい飲み物の話を聞いた生粋の江戸っ子二人が早速それを飲みに行ってみたが。明治維新の時のほのぼのとしたお話です。

# 第一章

珈琲

ざんぎり頭を叩いてみれば　文明開化の音がする

こんな言葉が流行っていた時代のことだ。とにかく世の中には様々な新しいものが急激に出回っていた。世の中がこれまでにない程に変わっていた時代である。

「今度はそれか」

「ああ、これだよ」

二人の若者がまだ日本の家が立ち並ぶ中で語り合っている。見れば一方は和服とは違うこれまでにまず見たことのないような服を着ていた。

「これを買ったんだ。高かったよ」

「それが洋服か」

「そう、これがだよ」

そのズボンとネクタイの服を誇らしげに相手に見せての言葉である。

「これが洋服なんだよ」

「動き易いかい？」

「それがちょっとね」

しかしその問いには難しい顔になるのだった。

「窮屈っていうかね。どうにも」

「そういえばまた変わった袴だな」

下を見ての言葉である。

「これはまたおかしなものだよ」

「これはズボンというらしいんだ」

「ズボン！？」

「そう、ズボン」

こう相手に答える。

「これをそういうらしいんだ」
「ズボンねえ」
「そしてこれはネクタイ」
首に巻いているものをわざわざ出して見せての言葉だ。
「ネクタイというものだよ」
「ネクタイか」
「これを巻くのが実に難しくてね」
「巻くっていうと首にかい」
「そうなんだよ」
今度は苦笑いと共の言葉である。
「欧米の連中はこれを誰もが首に巻いているんだよ」
「へえ、またおかしな風習だな」
「そう思うだろう。ところで今は暇かい？」
「ああ、まあね」
こう答える彼であった。
「今のところはね」
「そうか。じゃあ牛でも食べに行くかい？」
「牛！？というとあれかい」
「そう、あれだよ」
ここで二人は笑顔になるのであった。そのうえで言い合う。
「あれを食べに行こう。牛鍋をね」
「すき焼きだったか」
彼はふとその鍋の名前を口にした。
「確か。そういう名前だったね」
「そう、すき焼きだ」
洋服の青年も言った。
「すき焼きを食べよう。それでいいね」
「よしっ、じゃあ行こう」
「うん」
これで話は決まりであった。

「あれはかなり美味いらしいしな」
「僕ははじめてだ」
「何を隠そう僕もだ」
これは洋服の青年も同じであった。
「美味いというがね。果たして」
「どういった味なのか」
そんな話をしながらそのすき焼きを食べに行くのだった。とかくこんな話に満ちていたのが当時である。そしてその中でまた一つ。こんな話があった。
「コゥヒイ！？」
「そう、珈琲っていうんだよ」
茶屋で茶と饅頭を食べながら中年の男達が話をしていた。浅草の大工の留吉と魚屋の磯八である。二人はその饅頭を頬張りながら話をしているのである。
「その飲み物はな」
「またえらく変わった名前だねえ」
「またあれだよ」
「西洋からのか」
「そうらしいねえ。何でも亜米利加で随分飲まれてるみたいだよ」
磯八は自分の着物の中に手を入れて腕を組んでそのうえで留吉に対して述べるのだった。首が傾げられて少し右になってしまっている。
「わし等が茶を飲むみたいにね」
「またそりゃ随分と飲むんだね」
「その珈琲の店がこの江戸にもできたそうだ」
「へえ、そりゃまた」
二人共流石にもうまげではないがそれでも江戸という意識が残っていた。これが東京に完全になってしまうのにはもう少し時間が必要であった。
「面白いもんができたねえ」

「それでだよ、留さん」
ここで磯八は言うのだった。
「ちょいと考えたんだがね」
「何だい？」
「その店行ってみねえか？」
こう提案するのである。
「その珈琲の店にな」
「あっしとあんたでか」
「どうだい？」
また留吉に対して言う。
「そういうことで。ちょっと冒険にな」
「冒険っていってもまた随分とご大層なことだよ」
提案された留吉は難しい顔で腕を組みだした。もう饅頭は食べてしまい後は茶を飲むだけだ。だがその前で考え込んでしまったのであった。
「それが一体どんなものかもわからねえっていうのに」
「わからねえからいいんだよ」
だが磯八はここでこう言うのであった。
「わからねえからよ。江戸っ子は何が看板だい？」
「そりゃ決まってるだろ」
大工らしい威勢のいい声で言うのだった。その頭にある捻り鉢巻がここぞとばかりに目立つ。その鉢巻を誇示するようにしてまた言うのであった。
「度胸だよ、度胸」
胸を張って言う。所謂からっ風である。江戸っ子は喧嘩は弱いが喧嘩っぱやくそのうえ度胸だけはある。とにかく度胸が江戸っ子の看板だったのである。
「それだよ、やっぱり」
「それに今飲んだら初物だよ」
さらに言う磯八だった。

「今飲んだらな。どうだい？」
「初物かよ」
それを聞いて留吉はさらに乗り気になるのだった。ゴクリ、とその細い喉を鳴らしさえする。それと一緒に短く刈っているその白髪頭も動く。
「だったら」
「江戸っ子は初物だよ」
「ああ」
江戸っ子はこれも好きなのである。とにかく当時はこういった江戸っ子意識がとにかく強かったのである。こういった意識はわりかし後の時代まであったようである。
「わかるよな？それだったら」
「乗れってことかよ」
「留さんなら乗ると思ってるさ」
こうまで言うのだった。
「絶対にな」
「言うねえ」
言われてにやりと笑ってみせる。まんざらではないということだった。
「はっさんよお。だったらおいらも」
「乗るかい」
「乗るさ」
そのにやりとした笑みのまま答えたのだった。

## 第二章

「その言葉にな」
「じゃあ明日にでも行くかい」
「おうよ」
磯八のその言葉に頷いた。
「行くぜ。それならな」
「これで決まりだな。それでな」
「金はどうなんだい？」
「それはそんなにかからないらしい」
「へえ、そりゃいいな」
「向こうでは茶なんだぜ」
そのことをまた言う磯八だった。
「そんなにかかるわけないだろ」
「そういえばそうか」
言われて納得する留吉だった。
「それもな」
「そうだよ。だったらいいよな」
「ああ」
また磯八の言葉に頷いた。
「明日だな。じゃあ仕事があがったら二人でな」
「行くぜ」
こんな話をしてから次の日その珈琲を飲みに行くのだった。場所は日本橋の辺りだった。二人はそこに行くと少し顔を顰めさせることになった。何と洋服を着た人間や外国人も見るからだ。建物も随分と変わろうとしていた。
「この前こんなものあったかい？」
「いや、なかったよ」
まだ江戸にいるという意識の二人は西洋風の立派な建物を見上げ

てまず驚いた。
「しかも洋服着ている人間も多いし」
「日本橋も変わったもんだよ」
「いや、全く」
そう言い合っている二人の横を人力車が通り抜ける。それもまた明治になって出て来たものだった。とにかくもう江戸時代でなくなっていたのだった。
だが二人はまだそんな意識がないままにその珈琲の店に向かう。磯八がまだ日本の建物がよく残っている場所を指差して留吉に言うのであった。
「ここだよ」
「ここかい」
「そうさ、ここさ」
「見たところ変わらねえな」
留吉の最初の感想はこうであった。昨日二人がいた茶屋と何ら変わるところのない瓦の屋根におおっぴらに開いた木の店だった。しかも畳である。
「普通の茶屋とな」
「ところが。それが違うんだよ」
磯八は面白そうに笑って留吉に告げるのだった。
「これがな」
「要するに茶は出ないってわけか」
「そうさ。饅頭もな」
「饅頭もねえのか？」
「かわりにクッキィっていうのが出るらしい」
「クッキィ！？」
クッキーと聞いてもわからず顔を顰めさせる留吉であった。
「何だよ、そりゃ」
「かりんとうみたいなもんらしいぜ」
「何だ、かりんとうかよ」

留吉はそれを聞いてまずは安心した顔になったのだった。
「それならな」
「安心したかい？」
「何てことはないな」
笑ってその心境を述べたのだった。
「それだったらな」
「じゃあ入るよな」
「それは最初から決めてるさ」
江戸っ子のその威勢を見せての言葉である。
「だからだよ。行くぜ」
「ああ、合点だ」
磯八も彼の威勢に合わせて店に入った。そうしてすぐに和服の娘に対してそれを注文するのだった。
「その珈琲ってのをくれよ」
「珈琲ですね」
「おうよ、ここでその珈琲ってのを飲ませてくれるんだよな」
「はい」
娘はにこりと笑って留吉に答えた。その横では磯八が座っている。
「そうですよ」
「なら話が早い、それくれよ」
話を聞いてまた言った留吉だった。
「その珈琲ってやつをな」
「二つですね」
「ああ、それだ」
「後は。あれだな」
続いて磯八が娘に対して言ってきた。

# 第三章

「クッキィだったかな」
「クッキーですね」
「そう、クッキィだよ」
娘と磯八で発音がやや異なっていたがお互いそれはここではあまり意識してはいなかった。磯八にしてもそのクッキーというものが果たしてどんなものか気になってそっちの方に考えがいっていたからである。だからこれも無理のないことであった。
「それも頼むよ」
「わかりました。それでは」
娘は注文を確認してから店の奥に入った。それからすぐにまずは盆の上に置いてあるものを持って来たのであった。それが何かというと。
「クッキーです」
「おう、これがか」
「はい、そうです」
明るい声で二人の問いに答えその間にそのクッキーというものを置いたのであった。果たしてそれはどういったものか。二人が見てみると。
「あれ、これって」
「せんべいかよ」
見れば本当によく似ていた。小さく四角いがそえでも色といい何処かそうした感じだった。だが磯八は続いてこの菓子の名前を出したのであった。
「そばぼうろにも似てるな」
「そういえばそっくりだな」
留吉もその言葉に頷く。なお二人共根っからの江戸っ子なので言うまでもなく蕎麦には五月蝿い。しかも噛まずに喉で楽しむという

のも守っていた。
「それにな」
「だよな」
「クッキーですよ」
けれど娘は二人に対してあくまでこう言うのであった。
「そばぼうろじゃなくて」
「そうなのか」
「クッキィなのかい」
「はい。ですからどうぞ」
その明るい声でまた二人に告げる。
「召し上がれ」
「おうよ」
「それじゃあよ」
娘の言葉に頷いてからそのクッキーを口に入れてみた。するとこれが」
「おお、これはまたな」
「そばぼうろとはまた違うな」
まずはそばぼうろとは別物であることを口の中で確認した二人であった。
「しかもこの味はな」
「せんべいとも違う」
「これがクッキーですよ」
明るい声で返した娘であった。
「どうでしょうか」
「うめえ」
「こりゃいいや」
そのクッキーを気に入ったのか二人はさらに食べていくのだった。
見ればもう二人で何枚も食べてしまっていた。
「西洋人っていうのはいつもこんな美味いもん食ってるのかよ」
「そりゃ文明開化なわけだよ」

磯八の言葉は少し以上に違っていたがそれでも意味は通るものであった。
「いや、こりゃいいぜ」
「幾らでも食えるってわけだ」
「では続いて珈琲を持って来ますね」
「それで真打登場ってわけかい」
「珈琲か」
二人はクッキーを食べながら真剣な顔になるのだった。ところが口の中でまだもんぐりもんぐりとしていてそのうえ口の周りにそのクッキーの食べカスがあってどうにもおかしなことになっていた。けれど当の二人はそのことに全く気付いてはいなかったのであった。
その気付かないまま真剣な顔になっていて。そのうえでまた言うのであった。
「いよいよってわけだな」
「おうよ」
互いに頷き合う。横目で見合いつつ。
「それではっつあんよ」
「留さんよ」
仇名でも呼び合う。
「腹は括ってるよな」
「そっちはどうだい？」
「勿論だよ」
「こっちもだよ」
また言い合うのだった。
「その西洋人の珈琲ってやつ」
「拝んでみせようぜ」
殆ど出入りみたいなやり取りになっていた。とにかく暫くしてその珈琲が来たのであった。まずその珈琲が入れられているものを見て言うのだった。
「また変わった湯飲みだな」

「何か出てるぜ」
「カップです」
「カップ！？」
「何でえそれは」
娘の言葉を聞いてまた言うのであった。
「聞き慣れねえ言葉だが」
「それも西洋のやつってわけだな」
「はい、そうです」
娘はその盆の上にある白いカップをここで二人の間にそれぞれ置いた。白い皿の上に置かれた白く薄い、何か繊細な外観のものであった。
そしてその中にあるものは。また随分と真っ黒いものであった。黒く白いそのカップなるものの底が見えなくなってしまっている。二人はその真っ黒いものを見てまた言うのであった。
「ひょっとするとこれが」
「あれかい？」
「珈琲かい」
「これが」
「はい」
娘はまた実に明るい声で彼等に答えたのであった。
「そうです。これが珈琲です」
「何だいこりゃ」
「墨か！？」
磯八が顔を顰めさせてまずはこう考えた。
「これは」
「墨を湯に入れたものかい！？」
「違いますよ」
だが娘はそうではないと言うのだった。
「そういうものではありません」
「じゃああれだな」

今度は留吉が考えた。彼の見たところでは。

# 第四章

「あれだな。醤油だ」
「これは醤油かい」
「おうよ」
磯八に対しても答える。
「間違いねえ。これは醤油だ」
「成程、醤油を湯に溶かして飲むってのかい」
「そうに違いねえ」
腕を組んで強い表情で頷いての言葉であった。
「こりゃあよ。それに違いねえぜはっつあんよお」
「西洋でも醤油を使うってのかい？」
「そうだよ？あんな美味いもんはねえよ」
自分達の舌で述べた留吉であった。
「刺身も豆腐も。醤油がねえとまあ食えたもんじゃねえ」
「そうだな。じゃあこれは醤油か」
「だろうな。醤油を湯に入れたもの」
留吉は言う。
「それがこの珈琲ってわけだよ」
「それとも違いますよ」
しかし娘はそれとも違うと言うのであった。
「お醤油でもありません」
「上方の薄口醤油かい！？それじゃあ」
「醤油じゃねえってんなら」
「それとも違います」
娘は当然ながらそちらも否定したのだった。少し考えてみればどちらも同じものであるがいささか混乱している二人はそうは思えなかったのである。
「それとも」

「じゃあ何だい、こりゃ」
「だしかい？うどんか蕎麦の」
「珈琲です」
あくまでこう言う娘であった。
「これが珈琲です」
「だしをそのまま珈琲って言うんじゃなくてかい」
「これが珈琲かい」
「はい、香りは違いますよね」
「ああ、確かにな」
「この前の直侍のあれの香りじゃねえ」
歌舞伎の直侍のことである。舞台で実際に蕎麦を食べるのだ。その蕎麦の食べっぷりの威勢のよさもまたこの演目の人気の理由になっているのだ。
「全く別もんだな」
「それじゃあ。全く違うものなのかい」
「ですから珈琲なんですよ」
娘は結構辛抱強いのか穏やかなままで二人に述べるのであった。顔もにこにことしたままである。気の短い江戸の娘にしては大人しい程だ。
「これが」
「そうか。まあやっと飲み込めてきたぜ」
「とにかく。珈琲なんだな」
「はい」
「西洋の連中が飲むっていう」
「これが」
娘の言葉を聞きながら落ち着いてきてそのうえで少しずつその珈琲を見たそれは相変わらず黒く湯気を立てているのであった。
「それじゃあよ、はっつあん」
「おうよ、留さん」
二人は顔を見合わせて言い合った。

「飲むかい、これを」
「珈琲をな」
「どうぞです」
二人を前にして娘がまた勧めてきた。
「御飲み下さい」
「よし、じゃあよ」
「行くぜ」
声を掛け合って飲むのだった。まずは一口ごくりとやる。すると。
「な、何じゃあこれは！？」
「泥かい、これは！？」
二人は珈琲を吹き出しつつ大声で叫ぶのだった。
「泥を煮詰めたものかい、こりゃあよ」
「何て味だよ」
「最後まで御飲み下さいね」
「最後までっておい」
「こんなの飲めるかってんだ」
怒った顔で娘に対して言うのであった。顔も真っ赤にさせている。
「泥水じゃねえか、こりゃ」
「苦くて飲めたもんじゃねえ」
「ではこちらを」
娘は二人の言葉を聞いてあるものを出してきた。それは。
「んっ！？こりゃ」
「砂糖かい」
「はい、砂糖です」
見れば確かにそれであった。少なくとも塩でないのはわかった。
娘が差し出したそれを見て二人はとりあえず落ち着くのであった。
「これを珈琲の中に入れて飲まれてはどうでしょうか」
「珈琲の中に砂糖を！？」
「何でえ、そりゃ」
この話を聞き終えた二人はまたしても顔を顰めさせるのであった。

そうしてその顰めさせた顔でまた言うのであった。
「随分珍妙な飲み方じゃねえか」
「これも西洋の飲み方かい？」
「はい、そうです」
こう答える娘であった。
「これもまた。そうなのです」
「砂糖をねえ」
「変な飲み方するな、西洋の連中も」
彼等はまだ茶に砂糖を入れるといったことは知らなかったのである。砂糖水もあることにはあったが少なくとも茶そういった類に入れたりはしない。だからこの珈琲というものを茶のようなものと考えている二人にはこの飲み方が奇妙なものに思えたのである。
「まあいいや。こんなの苦くて飲めねえからな」
「全くだ」
「他にはこれもあります」
「ああ、それはな」
「わかるぜ」
今度出してきたのはミルクだった。これについては二人も聞いてはいるのだった。
「牛の乳だよな」
「それも入れるのか」
「はい。苦さがましになりますよ」
二人に教えるのだった。
「如何でしょうか」
「それを早く言えってんだ」
「全くだ」
ミルクのことを聞いた二人は声を怒らせて言うのであった。

# 第五章

「それを言ってりゃあよ」
「何だよ、この苦いのはよ」
「お話する前に飲まれましたので」
江戸っ子らしからぬ愚痴を述べる二人に対しての言葉であった。
「それで」
「ちっ、悪いのは俺達かよ」
「何でそうなるんだよ」
しかも二人はまだわかっていなかった。これでもかという程愚痴を続けるところにそれが如実に現われていた。だが二人はそれでも気付かないのだった。
「まあいい。とにかく砂糖とミルクを入れると」
「飲みやすくなるんだよな」
「その通りです」
娘はこういtった状況が馴れているのかあっさりと二人に述べた。
「ですから。どうぞ」
「よし、それじゃあよ」
「砂糖とミルクくれよ」
「はい、どうぞ」
何はともあれこうして二人のカップにその砂糖とミルクが入れられた。漆黒だったその珈琲はミルクを入れるとまずはそのミルクが渦を描いた。やがてその渦が溶け周囲にその白を拡げていき。そうしてその漆黒だった珈琲を黒から茶色というかそれかオレンジに近い色にしたのだった。
「あれっ、こりゃまた色が随分変わっちまったな」
「黒が何だ？橙色とも違うな」
まだ磯八はオレンジという色を知らないのだった。それで彼が知っている色をここで出してみたのである。それでも合っているとは

彼も思ってはいなかったが。
「何なんだ、そもそもよ」
「灰色じゃねえんだな」
留吉はそれがかなり不思議そうだった。自分のそのミルクを入れた珈琲を見てその目を丸くさせていた。
「黒と白でよ」
「ああ、そうだよな」
磯八も留吉のその言葉に頷いた。
「黒に白入れたら普通そうなるよな」
「だよな。何でなんだ！？」
今度はこのことを不思議に思う二人であった。
「黒いのに白を入れてこんなになっちまうなんて」
「おかしな飲み物だよな、全く」
「私も最初はそう思いました」
こう答える娘だった。
「ですが。そこは要領が違いまして」
「要領がねえ」
「それでこんな色になるってのかい」
それがどうしてもわからず首を傾げる二人だった。あまりにもわからずに首を捻ることしきりであった。その二人に対して娘がまた言ってきた。
「それでどうぞ」
「ああ、そうだな」
「そうだったよ」
娘に勧められてまた頷く二人だった。
「じゃあ。あらためて」
「飲んでみるか」
再びそのカップを手に取る。そうして飲んでみると。確かに先程よりは遥かに甘くそのうえ穏やかな味になっていた。かなり飲み易くなっていたのだった。

「ああ、これだとな」
「飲めるよな」
「全くだ」
「まあそれでも変な味だけれどな」
こう言い合う二人であった。
「けれど。いいか」
「こうなったら乗りかかった舟だ」
「おうよ」
威勢を取り戻して言い合う二人であった。既にそれぞれのその手には珈琲が注がれたカップがある。それを再び飲もうとしていた。
「飲むぜ」
「わかったぜ」
こうしてまた飲んでみる。今度は最後まで飲んだ。飲み終えてみると不思議と気持ち悪いといった感じは一切ないのであった。
「どうでしたか？」
「ああ、飲んだ後での感想か」
「それだよな」
「はい、そうです」
二人に対して答える娘であった。
「飲み終えてみて。如何だったでしょうか」
「如何も何もねえよ」
「全くだ」７６
まずは不機嫌そのものの顔になって言葉を返した二人であった。
「とんでもねえ飲み物だぜ」
「っていうか西洋人はこんなのを飲んでるのかよ」
「はい、そうです」
罵倒に近い言葉を聞いても穏やかな顔のままの娘であった。
「これを。いつも」
「こんなのをいつも飲んでるなんてよ」
「西洋人の舌おかしいだろ」

顔を見合わせて言うのであった。
「この味はよ」
「そうそう飲めるかよ」
「皆さんそう仰います」
娘はまた二人の言葉を軽く受け流した。まさに幾ら言われても、立て板に水といった感じで二人の言葉を聞き流しているようにも見えた。
「ですが」
「ですが？」
「何なんだよ。そっからよ」
「いえ、何でもありません」
娘の笑顔はさながらどんな時にでも笑みを絶やさない商人の娘そのものであった。だが何かを言いたそうにしているのは二人にもわかった。
「またどうしても気になるねえ」
「狐につままれた気分だぜ」
実際に互いの頬をそれぞれの手でつまんでみる二人だった。しかしそれをしてみてもやはり目は覚めないのであった、それも当然であったが。
「痛いしよお」
「夢じゃねえか」
「ではまたおお来しを」
「ああ、安心しな」
「それはねえからな」
それぞれの口で答えた二人だった。

# 第六章

「もう二度と来ねえよ」
「こんな泥みたいなもんよ」
「左様ですか」
そうした言葉を聞いても娘の落ち着きは変わらなかった。ここまで来ると江戸の娘にはどうしても思えない程であった。
「それはまた」
「何だよ、何も言わねえのかよ」
「来ないつってんだけれどよ」
「それはわかっています」
穏やかに返すだけの娘であった。
「それではまた」
「だから二度と来るかつってんだろ」
「誰がよ」
彼等はこう言い捨てて勘定を払ってそのまま帰った。確かにこの時は二度と来るものかとは思っていた。ところが一週間後には。
「いらっしゃいませ」
「おうよ」
「暫く振りだな」
留吉と磯八だった。二人はいささか憮然とした顔でまた店に来ていたのであった。
「ちょっとな。また飲んでみたくなってな」
「仕方なくな。来たぜ」
「わかりました」
「やっぱり驚かねえな」
二人がまた来ても特に驚いた様子のない娘を見て留吉はそこに合点がいかなかった。
「何でだよ。来ないつったのによ」

「皆さんそう仰いますから」
「皆もかよ」
「はい。皆さん一度はこんなもの飲めるかと仰います」
「それが俺達なんだけれどよ」
「なあ」
顔を見合わせて言い合うのであった。
「それでもよ。何かな」
「また飲みたくなってよ」
「それも同じなのですよ」
これが娘の言うことであった。
「そうは言ってもまた。それからまた」
「何度も来るっていうのかよ」
「皆が」
「そういうことです。そして馴れれば皆さん美味しいと仰るんですよ」
「成程」
「そんなもんか」
「それでは宜しいでしょうか」
また言う娘であった。
「珈琲お一つずつですね」
「ああ、そうさ」
「それじゃあな」
「珈琲二つ入りました」
最後に娘の明るい声が店の中に響く。明治がはじまって間も無くの。その騒がしい時代の一場面である。誰もが新しいものを前にして騒ぎ戸惑いそして楽しみ。その中でこうして珈琲も飲まれていたのであった。このようにして。

珈琲　　完

2008・12・10

## ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8420f/

珈琲

2010年10月8日15時19分発行